

杉本健吉寄贈作品について

村田真宏

平成16年度の収集作品のなかで、特筆すべきものとして故杉本健吉氏の作品群の寄贈を受け入れたことがある。この寄贈は、画家没後の限られた時間で大量の受け入れであったため、その詳細についての報告と作品公開には、一定の調査整理期間が必要であるため、ここでその概要を報告することとした。

杉本健吉は1905（明治38）年名古屋に生まれ、愛知県立工業学校卒業後、図案業に従事して生計をたてるようになった。その一方で、絵画の制作にも励み、1925（大正14）年には京都に岸田劉生を訪ね師事し、翌年の第4回春陽会展に初入選し、また第1回大調和展（1927年）にも入選するなど、画家としての活動も本格化させていった。岸田劉生没後は、第6回国画会展（1931年）に出品し、梅原龍三郎の影響を受けるようになり、1938（昭和13）年には国画会同人となった。1940年頃から奈良に通い、1942（昭和17）年第5回新文展に、また戦後の1946（昭和21）年第2回日展に、ともに奈良国立博物館をモチーフにした作品を出品し特選を受賞した。戦後、彼は画家としての地位を確かなものとする一方で、1950（昭和25）年から1957年まで吉川英治『新・平家物語』（『週刊朝日』連載）の挿絵を描き、続いて『私本太平記』『新・水滸伝』でもその挿絵を担当して、挿絵画家としても広く知られるようになった。1962（昭和37）年以降はヨーロッパをはじめ中国、アフリカ、中近東、韓国など海外スケッチ旅行をかさね、絵のモチーフに広がりを加えていった。1971（昭和46）年には国画会を退会、無所属となった。1987（昭和62）年には、愛知県知多郡美浜町に、その画業と制作をまとめたかたちで展示公開する「杉本美術館」が開館した。そして1994（平成6）年には、愛知県美術館で「画業70年の歩み 杉本健吉展」を開催。2003（平成15）年には、奈良県立美術館で「大和を描く 杉本健吉展」が開催された。そして2004（平成16）年2月に亡くなった。

杉本健吉の場合、生前、その作品の多くは杉本美術館に寄贈され、公開が行われてきた。一方で、画家は、制作のための資料として活用したい素描類など、相当数の作品を手元に置いてもいた。これらの作品について、晩年を迎えた画家は、杉本美術館はもとより、各地の公立美術館での収蔵と公開を希望するようになっていた。その遺志に添うかたちで、当館をはじめとする各館での受け入れが実現したのである。当館は、1994（平成6）年に大規模な回顧展を開催し、その後も担当学芸員が、生前から作品整理などに協力していたこともあり、画家没後の作品の受け入れにあたっては、その画業の全体像をほぼ把握できる196件というまとまったかたちでの寄贈を受け入れることとなった。内訳は洋画27件、水彩・素描161件、版画4件、資料4件である。当館で受け入れた作品件数は前述のとおりであるが、これには挿絵類などで1件で百葉を超えるものもあり、資料に分類したものを含めて、実質的な作品数として千点を超えるものである。

この作品群で、特に注目すべきものは、まず杉本健吉が画家としての活動に独自の境地を拓いていった昭和20年前後に奈良や名古屋周辺を描いた素描類である。それは《奈良 北円堂》（図1）、《二月堂》（図2）のように、コンテによる強く迷いのない線で、対象を的確に捉え、自在な変化を見せる画面構成と、その場の空気や光までも感じさせるものである。その描写力は、この時期、既に画家が卓越した素描力を身につけていたことを遺憾なく伝えている。この1940年頃から1950年頃まで制作されたと思われる素描類は、画材の入手が困難だった戦時下での制作も含まれており、コンテによるものだけでなく、墨を用いたものや、パステル類で描いたものなど多い。また静物画や自画像などモチーフにも広がりを見せている。これらの作品には年記がないものも多く含まれているが、この時期に制作されたと思われる素描類は45

点程を確認することができ、今回の寄贈作品の中で一つのまとまりを形成している。さらにこの時期の作品として、油彩の《仏頭》などを加えることができ、戦中から戦後にかけての充実した制作活動を知るにはまたとない作品群ということができる。

杉本の活躍は、このような奈良を中心とした制作時期に重なるかたちで、1950年から始まった吉川英治『新・平家物語』の挿絵によって決定的な広がりを見せた。今回の寄贈作品には、その挿絵の原画そのものと、それと関係する資料が多く含まれていることが非常に重要である。まずその一つは、画家自身によって「新平家物語挿絵」と記された紙箱に納められている156枚の挿絵原画で、これには連載が続けられた『週刊朝日』の印刷現場で使用されたと思われる整理票が貼付されたものも多くあり、まさにこの連載のために使用された挿絵そのもののまとまった資料である(図3、図4)。それに加えて「新平家物語挿絵反古」と記された紙箱には、単に反古だけでなく、やはり実際に挿絵として使用されたと思われるものをはじめ、挿絵と関連のある素描類が236枚納められている(図5)。さらに「新平家物語新装本用挿絵」78枚、またこれらと関係する挿絵類311枚を納めた箱もあり、杉本が『新・平家物語』の挿絵を制作するにあたっての推敲の様子や、『週刊朝日』連載完結後に行われた出版段階での表現の変化なども、原画レベルで研究することが可能となった。『新・平家物語』の挿絵は、はじめ他の画家によって挿絵が制作されていた。それが吉川英治の希望もあって、途中の第36回から杉本が担当するようになった。当初は短期間担当する予定であったが、結果として連載が完結する第355回まで続けられた。彼は、この連載のなかで、物語の展開に応じて表現にも自在に変化をもたせ、また印刷ページ上の割付などにも留意したことで、吉川英治自身はもとより、多くの読者からも支持され300回を超える連載を続けた。この挿絵の仕事は、画家にとって単に挿絵の分野でも評価を得たということにとどまらず、挿絵を描くことで新しい表現を獲得し、それが以後の絵画制作においても重要な意味をもつことになったと思われる。その意味では、これら挿絵関係の資料群は、彼のその後の制作活動を研究するうえで欠くことのできないものと言いうことができる。そしてこれら挿絵資料群に加えて、その後の『新・平家物語』に取材した作品として、《扇面 新平家物語》10枚、《火牛下図》38枚なども含まれている。彼は『新・平家物語』に取材した作品は、いわばライフワークのように制作を重ねており、これらは、この物語にかかわる制作がいかに重要なものであったかを示すものである。

これら重要な素描類や挿絵類のまとまりに加えて、寄贈を受けた作品群にはその制作活動のほぼ全貌を捉えることのできる作品が含まれている。初期のものでは、岸田劉生の細密な描法に影響を受けた油彩画《冬瓜とわさび》(図6)があり、また1938年頃、つまり奈良を描くようになる前段階の名古屋各地を描いた素描類も含まれている。これらは、杉本が岸田劉生から何を学び取っていたのかを直接作品から読み取ることができるなど、彼の初期の制作を知るうえで重要な意味をもつものということができる。そしてさらに1960年代以降の、杉本が意欲的に海外に出かけて各地を描いた作品もまた数多く含まれている。これらは新しく出会った風景を前にして湧いてきた感興を大切にしながら、それを自在に表現していくという、この画家の到達した境地をしめすもので、2003年のアトリエと自身を描いた《仕事場》など最晩年の作品までもが含まれている。これらは、この画家の長期にわたる制作活動の要所を押えつつ、概ねその全貌を把握するに足るものということができる。油彩画より素描類が圧倒的に多いこの作品群は、一般的には二次資料中心の研究資料的な性格が強いものと受け止められるかもしれない。しかし、杉本健吉の場合、必ずしもそうとは言えない側面がある。何故なら、この画家の

場合、タブローとその準備段階としての素描という区別はなく、それらは同列のものとして扱われていたからである。「素描即タブロー」という姿勢で制作を続けたのが杉本である。したがって、彼の場合には、とりわけ素描は重要であり、作品鑑賞もそこに道が開かれる必要がある。その意味では、素描中心の作品群に、『新・平家物語』の挿絵類を含むこのコレクションは、杉本健吉の画業とその魅力に触れるまたとない作品群ということができる。

現在、当館では順次、必要な保存処置と額装など、公開に向けての準備作業を進めている。また『新・平家物語』挿絵類については、担当学芸員が詳細な調査にも着手している。できるだけ早い機会に、これらの作品のまとまったかたちでの展示公開と、挿絵類の調査報告を行うようにしたい。

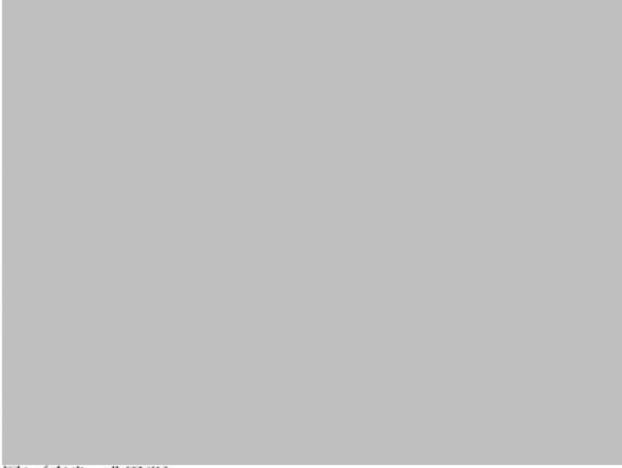


図1〈奈良 北円堂〉



図2〈二月堂〉



図3〈新・平家物語挿絵〉



図4〈新・平家物語挿絵〉



図5〈新・平家物語挿絵〉



図6〈冬瓜とわさび〉